
皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

殲滅天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇位継承者アドル・クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

【Nコード】

N9360S

【作者名】

殲滅天使

【あらすじ】

『テイルズオブバーサス』（アビスルート。ただし、色々なキヤラ出てくる）と、『イース?』の、超無理矢理コラボです。キヤラ入れ替えてみました。

序（前書き）

とりあえずキャラ入れ替えの説明。
今のところ分かってるのを書いたけど、まだ増える可能性あり。
書いてないキャラは入れ替えなしのキャラ。

『テイルズオブ』シリーズの世界
ルーク アドル

ガイ ドギ

ティア（グランツ） ティア（ティアルナ）

ナタリア アイシャ

アッシュ ガッシュ

ヴァン サイアス

『イース?』の世界

アドル ルーク

ドギ ガイ

ティア（ティアルナ） ティア（グランツ）

アイシャ ナタリア

ガッシュ アッシュ

サイアス リグレット

ラウド ゼロス

ガッシュの精霊たち マオ、ヴェイグ、ジーニアス

超無理矢理だけど、読んでくれると嬉しいな

序

この小説は、「イースVIE」と「テイルズオブ」シリーズ（主にアビス？）を無理やり組み合わせたものです（――；）

こういうのが苦手な方は読まない方がいいと思いますよ。

まだ見ている方は、覚悟ができた方だけですね？
やめておくなら今のうちですよ？

それでは、今度こそ行きます

「ふわ〜…」

赤毛の冒険家、アドル＝クリスティンは、いつもと同じように目覚めた。

しかし何かがおかしい。直感的にそう思ったアドルは、窓から外を見た。

「…!？」

アルタゴに行くために船旅をしていたのだから、外の景色は海以外にはあり得ない。そもそも、船には窓などないはずだ。

さらに、自分の服まで変わっている。

下は黒いズボン、そして服は白く膝まで届く長さで半袖、その服の下にも黒の半袖を着ている。

そこまではいいが。

「どうしては、は、腹が…」

そう、その服は、腹が出る形だったのだ。

「ああどうしよう…こんなのドギに見られたら…笑われるよー」

その時、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「あつはっは！アドル、もう遅いぜ。…腹出し服も意外に似合うじやねえか」

「え、本当…？ああよかったよ…。…ん？よく見ると、ドギも服変じゃないか。それに、なんか痩せたかい？しかも、剣なんか持つてどうしたんだい？」

ドギと言われた青毛の青年は、ワイシャツに山吹のような色のベストを着て、茶色のグローブを着けている。そしてスラックスを穿いていて、腰から剣を下げている。そんな彼の武器は拳なので、剣を下げる必要はない。

「おお、そうなんだ。似合うか？」

「似合わないと思うな」

ドギが落ち込んだのは、言うまでもない。

その時、ドアがノックされた。

「ルーク、ガイー。朝からうるさいですよー」

ドアが開き、二人が知らない男が顔を出した。背中まである栗毛、

銀縁メガネで軍服を着ている。

アドルとドギは顔を見合わせた。

「ルーク……？」

「ガイ……？」

『誰のことだい（だ）？』

その男は、二人の呟きに気づかないようで、

「おや？ルーク、いつ髪を切ったんです？それにガイも、髪を青くしちゃいましたかー。ぶっちゃけ、似合っていないですよ？」

ドギがさらに落ち込んだのは……言うまでもない。

「あのー……僕はルークじゃなくて、アドル・クリスティンっていうんだ。そして、こっちの青毛なのは僕の相棒ドギ」

アドルは、自分たちのことを説明し始めた。軍服の男が、誤解しているようだったから。

「そうだったんですか、これは失礼。しかし、どうしてルークやガイの服を着ているんでしょうね……ん？あなたたちは、昨夜まで何をしていたんです？というか、どこから来ました？」

アドルたちは昨夜まで、アルタゴ目指して船旅をしていたことを話した。

「アルタゴ……聞いたことのない地名ですね……。……！まさか……、いえ、もしかするとあるかもしれませぬー……」

「あー……僕たちにも分かるように説明してくれないかい？」

アドルが言うと、男は物思いにふけるのをやめ、

「これは失礼。実は、私の世界には、新月の日に、異世界とつながるだろう、という言い伝えがあるんですよ。……申し遅れましたが、私、ジェイド・カーティスという者です」

男、ジェイドはようやく自分の名前を告げた。

それからしばらく、アドル、ドギ、ジェイドは自分たちの世界についてなど話し込み、最終的に。

「お二方とも、剣術：ああ、ドギは拳ですね…に優れているようですので、私たちの旅についてきてください。もしかすると、二人が戻る方法も見つかるかもしれないですし」

『うわ、適当だな』

「何か言いましたー？」

『いえ、何も』

こうして、アドルたちはともに旅に出ることになった。

序？

「ふわ〜…シグルーン、朝ごはんできた？」

「んー…マヤ、おはよう…」

『…………あれ？』

アドルたちがジエイドと旅することを決めたその頃、他の部屋でも何かが起きていた。

「…はっ！貴女は、もしかして…公女アイシャさまですか…！？」
アイシャと呼ばれた少女は、驚いて目の前の少女の顔を見る。

「ええ、そうよ。あなたはもしかして、街で花を売っている…？」

「ティアです。覚えていてくださっただんですね」

「だって、あなたこの前ラウドに絡まれていたから。そんなことより…不思議な服ね」

「え…？きやあっ！何これ！」

ティアは驚いて自分の服を見た。いつものワンピースにストール…では無く、大きく立っている襟のついた茶色の長いワンピースのような服（裾の方が花のように大きく裂けたデザインだ）に、これまた茶色のブーツに二の腕まである手甲といった出で立ちだ。

そんなティアの格好を見てアイシャは。

「…………なんで同じくらいの年の子と、こんなに胸の大きさが違うのよーっ！何よ、この大きさ！不平等じゃないっ！」

「…え？」

そんなアイシャは、白と明るいミントグリーンの服を着て、黄色のタイをつけている。下は、裾を折ったショールパン、白のブーツだ。頭には、茶色のヘアバンドがついている。

「ほら、あたしのなんか、見なさいよ〜…。バストの部分がけっこう余るの！」

「こ、公女さま！何をおっしゃるんですか！」

「…あつ。シグルーンに聞かれたら怒られるじゃない…」

「いや、ツインテールにヘアバンドの方がおかしいかと…」

「そっちなの！？…あ、そうだティア。その…敬語なんかやめてよね。きつと、何かの縁でこうやって一緒になっただからさ」

「ですが…いえ、それもそうですね」

「ほら、敬語出た」

「あつ…その、よろしくね、アイシャ…ちゃん」

「『アイシャちゃん』かあ…まあ、しばらくはそれで許してあげるわ」

アイシャが言ったその時、部屋のドアが音を立てた。

「ティアー、ナタリアー。そろそろ朝食ですよー」

『……………ナタリア？』

その言葉の後、一人の男 ジェイドが入って来た。

「…おや。貴女方、ティアとナタリアではありませんね？どこのどなたですか？」

ティアとアイシャは、自分たちについて説明した。

「わたしはティアですが…貴方の言うティアさんとは別人だと思います」

「あたしはアイシャよ。二人ともアルタゴ公国のアルタゴ市に住んでるわ」

「なるほど、アルタゴですか…アドル、ドギの目的地じゃないですか」

「アドルに…ドギですって！？」

アイシャは驚いて言った。

「その二人って…」

「『赤毛のアドル』と、『壁碎きのドギ』よ！！」

「あの二人、貴女方の世界では、かなりの有名人だったんですか」

「あの二人…？」

「あたしたちの世界…?」

「おい、ジェイド。何やってんだ?」

ティアとアイシャが不思議がっていると、もう一人、男がやって来た。ドギだ。

「ドギ。この剣ちゃんと持ってきてくれよー! 部屋が散らかって困ってるんだよ」

もう一人来た。こちらは、アドルだ。

「あ、あ、あ、アドル! クリステイン!」

「え… 僕のことを知ってるのかい? 確かに、僕はアドル! クリステインだけど…。君たちは?」

「あたしは、アイシャ・サリ…じゃなくて、ただのアイシャよ。アルタゴに住んでいるわ」

「ティアです。あの、あなたがアドルさんということは、そちらの青毛の大きな方は…《壁砕きのドギ》さんですか?」

ドギは笑って答えた。

「そうだぜ。コイツの…アドルの相棒だ」

「なるほど。つまり、アイシャとティアもアドルやドギと同じ世界から飛ばされたんですね。となると…」

「僕たちの代わりに、もともとこの世界にいた人たちが、僕たちの世界に飛ばされたんだね」

「察しがよくて助かります。残りの方は、思い付か」

「し、失礼ね!! あたしだってちよつとは思いついたわよ!!」

ジェイドの発言に、アイシャは反論した。ちなみに、残り三人は苦笑した。

「それは失礼。…ああ、そうだ。私たちの旅についてきませんか? あなたの方の世界に戻る方法も分かるかもしれないし、私としても人手がほしいですから」

「だったら…」

「行きます」

こうして、アイシャとティアアもジェイドについて行くことになった。

「ああ、あの男と一緒になのか……」

序？（前書き）

イースの世界の舞台は？の舞台・アルタゴ公国、テイルズの世界の舞台はテイルズオブバーサスの舞台・ダイランティアです。

序？

アドルたちが別世界に飛ばされた頃、別の者たちもまた飛ばされた。

「ルーク、起きろー！」

「…うるせえな、俺はまだ眠いんだよ……」

「ヴァンとの稽古はいいのか？」

「……！！！」

ルークと呼ばれた少年は、あわてて起きた。

「ガイか…って、なんだ、その格好」

「いや、ルークの格好も変だろ」

「…は？」

ルークとガイは、それぞれ自分の服を見た。昨夜、寝る前まで着ていた服とは違う服を着ている。ルークは普段着ていない銀の鎧（銀色に限らず、普段から着ていないが）を着ているし、ガイもタンクトップにズボンといういつもよりかなりラフなかつこうになっている。

「何だ、これ…どうなってんだよ!？」

「……！！！」

ガイは何かに気付いたのか、突然部屋を飛び出した。

「なっ、おい、ガイ!？」

ルークも部屋を飛び出した。

「これは……どうなってんだ…？」

ガイは部屋を飛び出して周りの様子を確認した。そうしていると、甲板に出た。辺り一面海だ。しかし、昨晚街の宿に泊まったため、こんなところにいるはずがない。

「……!? な、なんで海なんだあ!? おい、ガイ!! 昨日、俺達、宿に泊まったよな!？」

「……確かに、宿に泊まったよな……ジエイドの旦那が、俺達をわざわざ海に運ぶなんてめんどくさいことをするはずがないし……」

「じゃあ、なんでこんな所にいるんだよ!？」

「アドル、ドギ。朝からうるせえぞ」

その時、船の中から男が出て来た。

「アドル? ドギ? 誰だ? 俺はフアブレ公じゃ」

「ルーク!!」

ガイが、名乗ろうとしたルークを極力小さくした声で止める。

二人はひそひそ声で話し始める。

「なんだよ!!」

「いちいち『公爵の息子』とか名乗るな!! もし命を狙われでもしたらどうする!」

「うつ……わ、わーったよ!!」

「何話してんだ? ……って、おめえらよく見たら、アドルとドギじゃねえな。どこのどいつだ?」

「な!!」

「……ルーク」

何か文句を言おうとしたルークを遮り、ガイは説明を始めた。
しかし。

「俺はガイ・セシル、こいつはルーク・フォン・フアブレだ。俺たちは、ニーズホッグにある街の宿に泊まったはずなんだが……」

「ニーズホッグ? そりゃ、地名か?」

「ああ、地名だ。ダイランティアの……」

「ダイランティア? 何だそりゃ?」

「?????」

全く話が通じない。

「…じゃあ、ここは……？」

「ここはメドー海の……アルタゴ公国付近の沖だな。お前ら……じゃねえ、アドルとドギって奴がそこに行こうとしてたんだ。そういや、あいつらどこに行ってたんだ？」

そう言つて、男は中に戻った。

ここまでの状況を説明しよう。

昨日までダイランティアの四大国の一つ、新帝国ニーズホッグにある街の宿に泊まったルーク達。ルークとガイ以外にも、ティアやジエイド、アニス、アッシュなどといった仲間がいたはずだが、どこに行つたのだろうか。

そして、今朝起きてみると、街の宿（陸上）にいたはずのルーク達は海上の船にいることに気付き、今に至る。

「……うーん、これはもしかして……いや、あり得るな……」

「おい、どうしたんだ？」

「ルーク、昨日、月は出てたか？」

「何言つてんだ？昨日は新月だったじゃねえか」

ガイは、ルークの言葉を聞いて、自分の推測に確信を持った。

「やつぱりか……」

「なんなんだよ、新月がどうしたんだよ？」

「新月の夜に別の世界につながることもある。……って言い伝え、聞いたことないか？」

「あるに決まつて……って、嘘だろ！？こつちも昨日新月だったのか！？」

「お前ら、何をまた二人で……。そういや、さっき言つのを忘れてたが…俺はラドック、海賊だ」

中から、男…ラドックが再び出て来た。

「海賊！？俺はそんな汚い奴らと一緒に乗ってたのか！？」

「嫌なら降りるか？周りは海だから、ついでに体も洗えるぞ」

「な……………」

「ルーク、頼むから余計なことを言わないでくれ…………で、ラドック。一つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

ガイは、昨日新月だったかどうか聞いた。こちら…アルタゴも新月だったようだ。

「うわあ、やっぱりか…………。こっちは、新月に関する言い伝えがあるのか？」

ラドックは、『どこかの世界と新月が重なった日、“訪問者”が来る』というのを話してくれた。

「ということは…………こっちの世界の“訪問者”が俺達つてことになるのか。そういえば、探してた奴はいたのか？」

「いや、いなかった。船から降りた…つてことは、あり得ないしなあ……………」

「…………そいつらが、俺達の代わりにダイランティアに行ったんじゃないの？」

しばらく、ただ聞いているだけだったルークが口をはさんだ。

「！そうか、あいつらとお前らが入れ替わったのか……………」

ルークは黙って聞いているだけだったのがイヤで口をはさんでみたのだが、その適当に言ってみた一言がラドックを納得させたらしい。

「やっぱりそうだったか。ありがとよ、ルーク。お前のおかげでこの謎が解けたよ」

「なっ、べっ、別に、お前の疑問を解決するために言ったんじゃないやねえぞ…！適当に言ってみただけだ、そこんとこ勘違いすんじゃないやねえ…！」

そう言つと、ルークは船の中に戻ってしまった。

「…ありゃ、何だ？」

「ただの照れ隠しだな。まったく、アイツも素直じゃないな」

「ああ、なるほどな」

そんな話をしていると、船の中に戻ったはずのルークが再び出て来た。

「……ガイ！部屋の位置どこだ！？」

ルークは、船の中で迷子になったようだ。

それから1、2時間すると、船はアルタゴに着いた。

序？（後書き）

次回から、アドル&ドギ、ルーク&ガイそれぞれの冒険が始まります。

第1話・1（前書き）

まずはアドル側から。

第1話 - 1

くダイランティア ニースホッゲ
新帝国

「……つまり、この世界・ダイランティアの四大国の代表選手が^{シケルス}集まって戦うのが、ユグドラシルバトル。で、本来選手だったルークさん、ガイさん、ティアさん、ナタリアさんの代わりが、僕達……です。ね？」

とある街の宿。アドル、ドギ、ティア、アイシャは朝ごはんを食べながらジェイドの説明を聞いていた。4人を代表してアドルが確認する。

「はい。そうです。いやあ、物分かりがいい人達で助かりました。」
「はわわっ、イケメンで頭がよくて……アニスちゃんどうしようっ王子様はルーク様って決めてたけど、アドル様もいいなあっアニスちゃん困っちゃう（／／／／）」

一緒に食べていた茶髪、茶色の目、褐色の肌をもつツインテールの少女が悶え始めた。彼女の名前はアニス・タトリン。人形を使っ^{パベッター}て戦う人形士だ。ちなみに、けっこう腹黒だ。

「アニス？ちょっと黙ってくださいね」

「はい」

「……（絶句）」

アドル、ドギ、ティア、アイシャは、手っ取り早く言うといースメンバーは揃って絶句した。

「あ、あー、どうもありがとう…（かなり棒読み）」
「アドルさん、わざわざ反応してやらなくてもいいんですよ？」
「むっ、大佐ってば酷いです」
「あ、ジェイドさん、“さん”と敬語はいりません。」
「そうですか。では、他の3人も呼び捨てにしますが…いいですか、
ドギ、ティア、アイシャ？」
「「おう（いいですよ）」」
「いいわ。許してあげるわ、ジェイド」
「…大佐をいきなり呼び捨て…ワガママ公女？」
「誰がワガママよ！？」
「あんただよ」

アニス、黒い部分が出ている。

「アニス。公女さまをワガママ呼ばわりするのはどうかと思います
よ」

「はい」

アドル、ドギ、ティアの3人は固まった。

……何なんだ、コイツ……

「アイシャも、いちいち言い返さないでくださいね」

「……わかったわ」

「そういえばアニス、アッシュとヴァンはどうしました？」

「まだ寝てるんじゃないですかあ？」

「そうですか。では、見に行つて来ますよ」

ジェイドは席を立った。ジェイドがいないということは、アイシヤvsアニスの争い(?)を止められる者がいないということである……

「……………」
「……………」

今2人は無言だが、しかし火花が散っている。

「あの、2人とも……………」
「今食事中……………」

アドルとドギが仲裁しようとするが、あまり効果はない。

「アイシヤちゃん、アニスちゃん、これから一緒に行動するんだから、2人とも少しは仲良くしてね？」
「……………!?!」

ティアがニコニコしながら止めに入る。ニコニコしているはずなのに、ティアの後ろから何か黒いモノが見える。
ティアの仲裁(脅し?)は、かなり効果があったようだ。

「あ……………」
「ごめんなさい」

先に謝ったのは、アイシヤ。

「はっ……! あ、あたしも悪かったよ……………」
アドル様のお近くにいたのが気に食わないけど……………」

「えっ、僕？」
「そっなの? ……なら、なんか面白そうだから、あなたの恋応援してあげるわ」

「わあい、いいんですかあ？」

アニスは喜ぶ。　　つか、態度変わりすぎだろ　byドギ

「……え、僕の意味は無視なの！？」

「おや？アニスにアイシャ。いつの間にそんなに仲良くなったんですか？」

「あつ、大佐」

その時、ジェイドが2人の男を連れて戻って来た。

「あれ、その人達…誰ですかあ？ヴァン奏長とアツシユの服着てますけど、別人ですよねえ？」

アニスの言う通り、ヴァンとアツシユの服を着ている彼らは、彼ら本人ではない。

「「あつ、お前、ガツシユ！？」」

「「サイアスさん（千竜長）！？」」

「このお二人もお知り合いでしたか」

「……ああ、お人好しか」

「これは、公女殿下。このような場所でお目にかかるとは。そして、ティア。元気にしてたか？」

「はい。マヤも元気……だと思えます」

「はわわっ、アドル様だけじゃなく、サイアス様、ガツシユ様もかっこいい……アイシャ、あんたの世界って、何でこんなにイケメンが多いの！？」

「ドギ、残念だったな。お前はかつこよくないってよ」

「うつせえ。つかガツシユ、お前、その服着たら、ただの魔王w」

W
」

「うん。まさか、知り合いがラスボスになるとは思わなかった」

ガツシュは、いつもの服ではなく、アツシュの服 黒に赤の意匠の服を着ている。それで黒髪だから、とても黒い。

「うるせえ。……それで、そのガキと青髪、なんかすごくワガママそうなツインテールは誰なんだ？ロン毛眼鏡がジェイド、そのすました野郎がサイアスなのは分かったが……」

「ぶーっ！！ガキじゃないです、あたしはアニス・タトリンですう！！」

「誰がワガママかつ！！あたしはアイシャ・サリ……じゃない、アイシャよ！」

「おや、ロン毛眼鏡とは、酷い言い草ですねえ……」

「すました……野郎……」

「サイアスさんはそんな人じゃないです！って、わたしの説明だけやたら短くないですか！？」

ガツシュの言った5人の特徴に、5人が一斉に文句を言う。

「じゃあ、青のロン毛少女」

「どっかのマンガのタイトルみたいに言わないでください！！……わたしは、ティアです」

これで、いちおう全員が名乗ると、アドルが予定を聞いた。

「あの、ジェイドさん。今日はどうするんですか？」

「アドル、貴方もさん付けと敬語はいりませんよ。…ナビミユウ」

ジェイドはナビミユウを呼ぶ。

「はいですの」

ジェイドが呼ぶと、薄い水色の小動物が出てきた。袋状の耳と手足は薄い水色だが、顔と腹は白い。

「「かつ、可愛い……」」

アイシャ、ティアは目を輝かせ、

「……………（むにむにむにむに）」

アニスはナビミュウの頬をむにむにし始め、

「……………（びょーん）」

ガッシュは耳で遊び始め、

「……………（なでなで）」

サイアスは頭を撫で始めた。

「おや、皆さん、ナビミュウが気に入ったみたいですね」

「みゅっ、みゅううう。耳は痛いのですの……」

「第2の非常食……」

「みゅっ!？」

「おいおいアドル。そいつはピッカードじゃないんだぞ（笑）」

「うん。不味そう」

「失礼ですの!ー!ミュウは不味くないですの!ー!」

「（ニヤリ）なら、いつか料理してやんよ……」

「みゅううう！！（泣）」

「アドル。いなくなるのは困るんで食べないくださいね」

アドルは文句を言う。

「えー……………」

「そうよー！！こんなに可愛いのに、食べたりしたら可哀想じゃない！！」

「そうですよ」

ティアもアイシャに加勢するが、

「食べるくらいなら、わたしがお持ち帰りしてぬいぐるみにします
！」
テイクアウト

「……………ちょっと待てーい！！……………」

6人に止められた。

「……………アドルもティアも、ユグドラシルバトルの間は手を出さない
てくださいね」

「ほっ……………」

「……………えー……………」

「ただし、終わったら、煮るなり焼くなり好きにしていいますよ」

「……………やったー！！」

「みゅううう（泣）」

怖がったナビミュウに、ジェイドは言う。

「それで、最初のフラッグはどこにありますか？」

「みゅううう……ボクの命の危機なのに、酷いですの。……最初のフ
ラッグは………帝都ニブヘイムですの」
「それじゃ、行きますよ」

8人+ナビミユウは宿を出た。

第1話 - 1 (後書き)

次は、ルーク側行きます。イース? やりたいなあ…

第1話・2（前書き）

ルークは少し丸くなっています。

第1話・2

くアルタゴ市・港

「さあ、ここがアルタゴだぜ」

ラドックの言葉で、ルークとガイは船を降りる。

「ほう…なかなか綺麗な町だな。さて、音機関はあるかな…っと」
「こんな所に音機関なんかあるわけねえだろ」

それからガイがラドックに礼を言い、ルークとガイはアルタゴ市内に入ってしまった。

「あー、あー」

広場でまだ小さな女の子が花を売っているようだ。『ようだ』と表現が曖昧なのは、女の子が全く言葉を喋らないからだ。

「なんだあ？」

「花を売っているのか？1つ買っていこう」

「って言っても、この世界の金なんかあるのか？」

「そうか、ガルドじゃ払えないか……。……。お？」

ガイが財布から小銭を出すと、出てきたのは……

「「……………なんで？」」

ガルドではなかった。

「あ、これはもしかして……この世界の通貨に変わったのか？」

ガイは試しに、その小銭で払ってみた。どれを出せばいいかわからないため、女の子に見せてみると、『5』と書かれた小銭を持っている。

「あー……」

その女の子はルークの赤毛をじっと見る。

「俺か？」

そしてルークの後ろに回ると、

「痛つてえええええ!!」

髪の毛を引っ張った。

h?

女の子は、ルークが叫んだのが面白かったのか、さらに引つ張る。ルーク、若干涙目。

「痛えつつつてんだろ！！離せこのクソガキ！！」

「ふえつ……」

ルークに怒鳴られ、女の子は泣きそうになる。

「……うっ」

「はあ……。ルーク、いきなり女の子に怒鳴るんじゃない。…このお兄さんの赤毛が気になったのか？」

「……（こくこく）」

女の子はうなずいた。そしてまたルークの髪に手を伸ばす。今度はそつと撫でる。

しかし撫でるだけではなかった。

「（にぱーっ）」

そして、ガイの方を向いてにつこり笑う。ルークの髪は一本の三つ編みになり、所々に花も編み込んである。一方、居心地悪そうにしていたルークは全く気付いていないようだ。

「ちよっ……ルーク…ぶっ、くくくっ…お嬢ちゃんも、上手いな…」

「おい、ガイ、どうし……………」

「んー？」

女の子は、ルークが突然黙った訳が分からないようだ。

その数分後、アルタゴ市に『赤い髪の悪魔』が現れたという話は、後に都市伝説になったとかならないとか。

それから街を一通り歩き回り、もとの広場に帰ってくると、先ほど花を売っていた女の子と、ルークとガイがよく知る少女がいた。

「「……ティア!?」」

少女の名前はティア・グランツ。ルーク達と旅をしていたが、彼

女も飛ばされたのだろうか。

そして、長い赤毛の青年がティアに絡んでいる。

「なあなあティアちゃん。オレサマについて来なよ」

「お断りさせてもらっわ」

「そんなこと言ってるけど〜じゃあ、コレあげるって言っても、来ない〜？」

そう言っ出て出したのは、ピッカードという茶色の小動物だ。

「か、可愛い……」

「うー」

頬を紅潮させたティアの服を、女の子が不機嫌そうに引っ張る。

「……はづ。ごめんなさい、マヤ。……ゼロスさん、貴方の願いは聞けないわ」

女の子はマヤ、赤毛はゼロスというらしい。

「なんだよ、このオレサマの願いが聞けないっての〜？」

離れて見ているルークはイライラしている。

「なんだよ、あのゼロスって奴！！ティアにあんなに近づいて……」

「おっ、焼きもちか？」

「ばっ、おまつ、何バカなこと言っただよっ！誰があんな冷血女に！！」

とか言いつつ、ティア達の方に走るルーク。

「てめえら！！何やってんだよ！？」

「ルーク！？」

「なんか余計な野郎が来たよ…って、ティアちゃんの知り合い！？」

「ルーク…に、ガイ！？」

「俺はオマケか」

「か、かか勘違いすんじゃないぞ！？お前が心配だから来た訳じゃないからな！！そこで騒がれてると迷惑だから来ただけだからな！！？」

「……………（素直じゃないねえ…）」

ルークがベタなツンデレを出すと、ゼロスの部下が言う。

「貴様…この方をどなたと心得る！？ロムン帝国の無敵艦隊を撃破したゼロス千竜長だぞ！！」

「はあ！？兵士ごときが俺に『ごちゃごちゃ言ってるんじゃないぞ！！俺は…』」

「ルーク。この人達に言っても無駄よ」

「むっ…！！」

ティアの言葉で、部下は更に煽られたようだ。

「貴様ら…………その無礼の数々により、全員まとめて牢屋送りだっ！！」

「おいおい…………いくら何でもそれは酷いんじゃないの？」

ゼロスは言ったが、部下に言い負かされた。ルーク、ガイ、ティアはゼロス達に連れて行かれた。

第1話・2（後書き）

ティアはマヤを猫可愛がりしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9360s/>

皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

2011年11月17日21時24分発行